

水稻新品種「キヌヒカリ」

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	古賀, 義昭
巻/号	43巻8号
掲載ページ	p. 374-374
発行年月	1988年8月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



研究 通 報

水稻新品種「キヌヒカリ」

古 賀 義 昭

1. 来歴と育成経過

キヌヒカリは1975年に強稈・いもち病抵抗性強及び良食味の中生品種の育成を目標として、収2800×北陸100号のF₁に北陸96号(ナゴユタカ)を交配し、系統育種法によって育成した。収2800はコシヒカリの良食味にIR8の短・強稈性を組み合わせることを意図して育成された系統であり、これに短稈・良食味系統の北陸100号(コシヒカリのγ線照射により育成)が組み合わせられ、このF₁



左コシヒカリ, 右キヌヒカリ

にいもち病抵抗性と収量性の付与をねらいとして北陸96号が交配された。1981年に収3877の試験番号を与え、1983年に北陸122号の系統名を付与して各府県奨励品種決定試験に配布してきた。1988年5月31日に「キヌヒカリ」と命名され、水稻農林290号に登録されたものであり、同年から茨城県および福井県においてそれぞれ大空およびフクホナミに替えて奨励品種に採用された。

2. 特 性

育成地での出穂期はコシヒカリより1~2日遅く、“中生の早”であり、大空より2~3日早い。茨城県では大空とほぼ同じ出穂期で“中生の早”であり、福井県ではフクホナミより約2日早く“中生の早”である。稈長はコシヒカリより13cm前後、大空より約5cm短く、フクホナミとほぼ同じで“やや短”に分類され、稈質は“やや剛”である。耐倒伏性はコシヒカリ・大空に比べると明らかに強く、フクホナミと同程度で“強”に分類される。穂長は大空と同程度であるがコシヒカリ・フクホナミより短く“やや短”で、穂数も少ない。粒着は“やや

密”である。草型は“中間型”であり、葉は立ち型で草姿は良く、熟色・登熟とも良い。いもち病に対しては抵抗性遺伝子*Pi-t*をもち、抵抗性の程度は、葉いもち・穂いもちとも“中”で大空・藤坂5号等とほぼ同程度であるがコシヒカリに比べると明らかに強い。白葉枯病抵抗性は“中”であり、大空よりやや強いがコシヒカリより若干弱く、縞葉枯病に対しては抵抗性遺伝子をもたずに罹病性である。穂発芽性は“やや易”であり、コシヒカリ・フクホナミに比べると明らかに発芽しやすい。収量性は前記3品種とほぼ同程度であり、玄米品質は“上下”である。千粒重

第1表 キヌヒカリの食味試験結果

項 目	コシヒカリとの評点差			
	2-1.0	-0.5	0	-0.5-1.0
総合評価	4	6	5	1
外 観	3	8	4	
うま味	1	2	6	7
粘 り	1	10	4	1

程度であり、ホウネンワセ・大空・フクホナミ等よりすぐれる(第1表)。炊飯米の色は白く光沢がある。

以上の特性からこの系統の特徴を要約すると食味が良く、耐倒伏性が強く、いもち病にも“中”程度の抵抗性をそなえており、コシヒカリの弱点を改善した点である。欠点としては穂発芽性が“やや易”であり、縞葉枯病に罹病性である点が挙げられ、それぞれ栽培上の注意が必要である。適応地域は熟期からみて北陸・関東以南の平坦地域である。

3. 命名の由来

食味を絹肌にとたとえて表現したものである。炊飯が白くかがやいて光り、その絹肌のような外観と歯ざわりを表している。(北陸農業試験場作物第1研究室長)

Yoshiaki KOGA: Newly Released Lowland Rice Cultivar "Kinuhikari". 農業技術 43 (8), 1988.